

底本・白鹿本  
校異・竹冷本

花供養

(外題・原題箋)

(表紙見返し)

序

みやこ東山のふもと、双林の  
蘭谷のあたりにとし久しき  
花ありて、其にほひは大やしまの  
くぬちこと／＼行わたりつゝ、みち  
奥のさとの名におもひしのぶ人、  
しらぬ火のつくし方に心をつく  
せるともがら、いとさはぞなん

ありける。ひとゝせ此樹かれ  
うせむとせしを、ねもごろに其  
孫樹を養ひたてゝ、再びかぐ  
はしき色香をにほはせ、なほ  
盛りの年の長からん事をねぎて  
泰山府君の法を修せるは、  
今の蒼虬うしにぞあなる

寛政未の春

瑞馬（花押）

（序一ウ）

守る甲斐は此あけぼのゝ山桜

手桶にすめる春雨の水

黄鳥の土もの竈を鳴越へて

早苗のたけに里の静かさ

ほそ／＼と月さしかゝる膳の上

膝かきあはす秋のかたびら

白露の置あまりたる長堤

木を伐音のひゞく山端

蒼虬

鹿古

亨

斗九賀

乙道

後楽

在貫

月峰

あけくれを鳩に慰む椽の先

思ひがけなきけふの初雪

年を寄る布留の社の札配り

落せし銭の見ゆる流れ井

役しまふ駕をもて来る宿はづれ

引むすびたる帯の俤

夏草の穂にあらはるゝ恋をして

むかひ近ひの月ぞ涼しき

あら家に百万遍を申なり

驢丹

芹水

五芳

杜隣

双南

春也

其白

羅城

百池

かろき咳気のはやる衣更着  
木の下や花をかざしの旅箆筒

あげる雲雀や小塩大原

朝心そよ／＼風の吹わたり

肩にかけたる山伏の珠数

杜若つゝじも残る庭のうち

二代の貧にひな作りゐる

後づれは茶を汲ほどに物馴て

夜番を逗る雨の降出し

芦涯

葛年

其成

都雀

黒樹

南栄

如風

馬印

鬼荊

秋の来て胡弓に習ふ小唱ぶし

上の鯖江の蝸もやむ

一とせの葎をむしる塚の月

飯焚ほどは松かさである

引汐になれば鳥のさはぐ也

どんみりしたる空に貝ふく

右一順

一重づゝ桜咲けりひがし山

越後新潟

喜年

古光

破巾

斗雪

木貞

棹雪

執筆



暮てやゝ鳥啼花の山家哉  
 梟の里へわたれる花の宵  
 曲江や風のよどみの花筏  
 花の野や駒食乱すかたつむり  
 花の雨蘂より晴て日の匂ひ  
 ちる花や蛙の上る橋の杭  
 花の香を惜むか山の薄曇  
 さゞれ江や花の香ひの横たはる  
 鳥さしの二重になるや花の下

越後目来田 里竹  
 梶屋敷 若水  
 左林 佳青  
 與竹 路筌  
 古風 指翠  
 卮萬

猛かな獣は住ず花の山

古稀の春をむかへて

越し方は忘れがちなり花の春

寝るほどを寝て桜咲鞍馬哉

曇るやと分別のつく花の暮

花曇人待寺の茶の匂ひ

花になき花にかくるゝ夕雀

古川や花に心の置所

さくらかな花に明るき松の中

花に寝て風情を尽す嵐哉

、  
萩里

、  
荒井  
如蘭

、  
高田  
几丈

、  
幾丁

、  
紫石

、  
芋園

、  
巴丈

、  
如竹

、  
左琴

越後にて

あら海や花の匂ひのおし渡る

浪の朝日に乙鳥の飛

春惜としのゝ扉をさし捨て

よき人来よと笛しらべけり

みおさめの月はしばらく雲の有

猪とる穴に女郎花ちる

箸鷹のみよりに寒き秋の声

煙草のみなになりし空腹

車大 几丈  
大、大、丈  
丈大 丈

とき掛る絞りに窓の横明り

蚊屋釣草の雨はてしなき

恨いふ首田栞辺の物狂ひ

住吉丸に末しらぬ恋

盃に蜘蛛はひ寄て驚かす

萩をうしろにさやかなる月

稲守が地藏和讃の灰なり

七尾の鯖も秋のにぎはひ

水そゝぐ枝松寒き手行灯

丈大丈大丈大丈大

時計のきざみ音の冴つゝ

大

夜の花灯の消るほど散にけり

信州善光寺

柳莊

手の届く花と成けりゆふ桜

、

希言

うつすりと花煙たつさくら哉

、

鱸由

とどまらぬものと成けり夕ざくら

、

如風

桜戸や地虫の穴もあいてある

、

文地

殿守のいとまや花の散あした

、塩名田

珂則

花に風人の寢覚を風の吹

、今岡

胡園

腰かけや詠さくらに余念なき  
身にしめる春をもちりぬ朝桜  
かならずは月の高根に風起る  
鳥たつや餌さしの笠も花の雪  
花の陰よし簾さへ物床し  
咲みちて散を詠や山ざくら  
花盛松のあらしも静なり  
山ざとや数の子いはふさくら狩

、七十八歳

むら女

、斤倉

仙丈

、

、三明

紫燕

、上諏訪

自徳

、林村

柳枝

、榊

朝左

、林

風子

うか／＼と請合にけり花の留守

武州青梅小ミノ庵

支元

山鳥のほろゝもつらし散さくら

、

雪才

宵闇もなくて桜にまた一里

、

雪川

心ぐるし心おかしや花曇

、熊谷

月樵

神がきにて

尋常の枝も手折な花盛

江戸

紗言

いにしへは今よさくらの散る寒さ

、

午心

日ざかりや雲なき空に桜散る

上州宮崎

朔宇

ちる花に日朧の山となりにけり

、

相生

百川

世の慾を桜に捨る此日かな

、

大原

白斗

あけぼのや硯にうける花の露

へつらはぬ花はことしも咲にけり

花守の酒ぐせもなき男かな

似合しや花に煮染のつく／＼し

炭竈の崩れしまゝや散桜

皇の名に呼れたるさくら哉

、  
麴舟

、  
楚室

、  
一鬼

、  
青蒲

、  
杜谷

、  
栄暉

何はなくとも花さく山の小家哉

山陰や酒尽て散るゆふ桜

、  
下毛柏木

、  
桃葉

、  
燈居



花の旅風いとはぬ身でもなし  
明日はちる花見て過ぬ夕山路  
夕ざくら家ある人はとく戻る  
動くほど外山のさくら咲にけり  
中／＼に常の夜はなし花盛  
えらぶなら春は桜にかぎるべし  
是をかうといふ処なし山桜

草庵

をろ／＼と桜動て見せにけり  
草の葉に置てもみたし散桜

、

尺樹

下総

月船

行脚

一茶

甲州浅原

直洞

、

雄生

、古市場

美敬

、落合

倭士

、

物成

、宮沢

委曲

押なべて山路は花の月夜哉

、加賀美

月舎

山ざとはさくらに隈もなかりけり

、戸田

普昌

暮たれば又月夜にて散桜

雲水

嵐外

遅ざくらは是にも月のかゝりけり

、藤田

漢甫

散からに眼のはなされぬ桜哉

、

蠲守

里はなれ住かひのある桜かな

、

鏡平

ありたけを身に引受し桜哉

、

可都里

我袖に月かげすへるさくらかな

加賀

十井

夜はまだ寒き庭の踏草

曳鴨の近き入江を啼出て

市のやすみに風の淋しき

家具櫃のひくき屏風に隠れ兼

相役に逢ぬ日もなかりけり

朝雨に寺中の蓮を見て通る

桃湯の匂ひかたびらにつく

水萱にしばらく国の思れて

むかしめきたる神主の太刀

拳遠

李下

几丈

槐路

一抄

十枝

子仙

凸山

桃化

敷台を草履はかせる鳥の糞

関の書ものわたす手燭火

秋の風雲の座れる月を見て

岸のひたひに咲く女郎花

捨ぬ気のつたなかりける古団扇

上なき君をうつす傀儡

東南の花の遅速を告る時

今年もきかむ庵の鶯

犁松

北台

樗陰

魯童

觜晋

素友

蘭吹

執筆

けふの日もまた遠山のさくら哉

加賀 其如

かくまでも花散中の藁家哉

、 対山

朝ざくら木陰の外とを水消ぬ

、 圭山

雲水やわきて桜の一重なる

、 楚嶠

松が枝のめにたつ夜の桜かな

、 似咲

鴛鴦の花につれなき羽ぶり哉

、 文溪

たそがるゝ桜の色をさらし鮒

加賀 樗陰

柳静まる岡の小流

桃化

鷺の友うぐひすに啼かちて

机はなれの肘を煩らふ

怠りを心にしりし月の雲

くちの古底に秋の水草

大かたはことしの酒のうす濁り

手枕などと詠みてむつまし

京に入る宵の月代剃合て

はれすましたる峰の松風

北台

陰

化

台

陰

化

台

陰

初ざくら歳／＼ぬれて咲に鳧

加賀

北台

物いはぬ人もありけり花の山

、

桃化

さくらちる里は萩結ふ住居哉

、

蘭史

磯山や鶴のふみ行朝ざくら

、

勉文

山寺の春こそかはれ初ざくら

、

十升

花にのみ暮行里の無田地哉

、

北雁

汐風の雫夜を持さくら哉

加賀高松 来止

やり水に夜は残りけり家桜

、 自明

華名たつ網代庇の住家哉

、女

野柳

八重ざくら舞樂の揃ふ朝付日

、

豕白

いくたびか花に恥かし老の杖

、

壺石

祇園あたりの花に酔て帰りしも十五年

風さわぐとよめり桜の動ぬ日

、

御風

遠ざけて見る我宿の桜かな

、

三京

かざゝばや夕日もやどる花の袖

、

女

芝艶

三日月や留守の庵の花盛

、

牧之

種まきし畑まであらず花見哉

、

舎雄



切升やうへに隣の花ざかり  
日を遂て見ばや尾上の犬桜  
物うりを背戸よりとほる桜哉  
花のなき山より明て花曇  
残る日の桜ひとしき庵かな  
浪の音聞静めけり花の奥  
花に我心とゞかで散る桜  
夕風や誰も見あげて峰の花  
散り仕舞花に夕日の小雨哉

、 、 、 、 、 、 、

女

邪丸 卜雅 文行 三峰 古角 錦子 蒼玉 玉枝 五卿

有明や月も其まゝ花曇

物もする心の中の桜哉

弁当もそこ／＼にして花見哉

、

、

、

鳳五

白狐

可常

青雲の朝定めけり遅桜

鄙人の袖口厚し花曇

初花や空にすみきる人の塵

花にさす日に衣干麓哉

折を得て茶に見る垣の初桜

加賀暮柳舎

、

、

、

、

車大

雄雌

眠和

可立

菓遊

初花や薄縁もたぬ茶やも有	、	周馬
けだかさには挿んでも見る花の雲	、	歌の井
暮かゝる山路や花に水の音	、	夢庵
山陰やをなじ桜に鳥の声	、	犁松
水汲の路や鳥啼谷ざくら	、	蘭吹
鳥の声桜に人のなき日哉	、	兔三
立退て見ればみるほど桜哉	、	素后
花くれて聞もの多し机	、	髯青
咲かゝるふもとの花や人の声	、	松斗

神垣に一だん高き桜哉

人さらに花まつ心安からず

有明のさくらを人も覗きけり

、

、

、槐庵

子仙

素友

李下

い勢人や待尽したる夜の花

賑はしく矢田野の桜咲にけり

朝夕の花にうつろふ扉かな

都辺や花によしある家作り

東雲や帆姿つゞく島の花

越中高丘

、

、

、魚津

、

壺仙

仝

楚江

太翼

魯山

花盛地盛かたまる作り道

うつり気は花にありけり人心

人顔のみへて有明さくら哉

花の山いざよひの際もなかりけり

追分や桜のもとのおこし米

酒の酔さめて見直す桜哉

朝の月夜桜がもとの桔槔

桜狩火縄をふつて戻けり

朧夜をにほひ桜のまこと哉

、

東阜

、

芳菓

、

文景

、

周台

、富山

錐一

、

霞立

、

子丑

、

都史

、

巨泉

酒つけて足もむ花の木陰哉

雲一重帯て桜の匂ひ哉

薄暮や花の乱れの人通り

何となく世にある身哉花に鳥

花さくや其日帰りの預け鐘

初花や越路を伝ふ朝煙

花の中置忘れけり杖と笠

花守のひとり延すや顔の皺

、  
玉賈

、  
呂十

、  
花菜

、  
吳山

能登川尻  
、  
遅逸

宇出津  
、  
一夫

、  
八湖

、  
柏茂

花の日の暮て静けし水車	、	あふち
風止て山に人あり花曇	、	百几
菜摘川かけて葛城花桜	、	黄馬
夕ざくら海なき国をかぞへけり	、	竹姿
里ざくら葉がちに成て咲に鳧	、	碩茂
桜さくや能登の島山雲晴るゝ	、	五雲
狩杖も切かねて居る花盛	、	千瓜
天の戸や嵐に島の花の波	、	玻井
関の戸に笠とる朝の桜哉	、	嵐枝
		黒島
		武部

明がたや桜へわたる川鳥

、ソラ

岸芷

山川や花にしからむ一しきり

、ノトへ

麦杜

片里や花に暮たる古社

、クロシマ

加由

家を出て花より外に家もなし

、

破巾

初はなや心かよはず江の向ひ

、田鶴浜

李溪

静さにたえて誠を散花歟

、南越ツルガ

扈言

雲鳥や花のむかふの人の声

丸丘

飛声

朝水を汲む芹の谷川

甫立



壺漬の去年の梅干封切て

ふるき障泥の反かへりけり

たち待や月の峰越す諏訪峠

薦のまとへる椎のころび木

百姓の家にむかしの桜哉

植かへて見直す花に人老ぬ

人心花にふもとの家うつり

夕栄の桜にもどる女かな

、丸丘

振々

路江

里晴

竜玉

晨風

振々

飛声

松茂

曇る日は猶奥深し花の山  
 花に寝る鳥の白さや月の庭  
 よき雲の濤たちにけり花雪吹  
 暁を誰か見付たり花の里  
 山ざくら人折／＼にふるめかし  
 散花に禰宜が烏帽子の傾けり  
 雨の日のひぐらし人や遅ざくら  
 昼ごとのほこりに月の桜哉  
 けふもまた山に人あり遅桜

洞々  
 里晴  
 渡柳  
 竜至  
 古蓼  
 路江  
 有竜  
 友甫  
 帟洞

狩くれて花の岩間の宿からん  
 里人や昼のさくらの日陰もる  
 ねぢぼしの大根も花のひとつ也  
 月薄く花の麓の夕煙  
 山かげや花照返す朝月夜  
 咲花に浅井の水のうるみけり  
 朝の花親殿馬に召れたり  
 我恋はゆふべの花の散中ぞ  
 花の山ひき馬眠る麓かな

、  
 僧  
 江州石部  
 、  
 良交  
 沢雲  
 甫立  
 酢子  
 、  
 寛子  
 蚪玉  
 亀洌  
 西湖太田  
 二鶴  
 知石

着のまゝに寝てしまひけり花戻	義仲寺	祐昌
死ね／＼とうしろに花の夕かな	、	重厚
草庵に仮寝して花の散を見て		
味噌のさい他力念仏桜かな	江州海津	琴桃
大切な花より風は起りけり	、 万木	何嶺
見巡るや花に薙の敷所	、 途中	一溪
花に塵子持鴉の啣けり	、 旭里	松羅
行／＼て古郷床し山ざくら	、 大津	又呼
花の雲月は河原の左大臣	、 草津	四老

こぞりては踊る小里よ遅桜  
仁和寺はいとゞやさしき桜哉

、 八マン  
、 佐川

末子 芳志

垣ほねに賤が植たる桜かな

勢州津

蝨山

蝶吹ほどにゆふ暮の風

子良

狭衣を春のうしほの露にして

鳥翠

心ばかりの柴の折箸

山

月影のやゝ傾くと申けり

良

駒曳とのゝもどらるゝ比

翠

冷／＼と軒の雫に米を搗キ

伏水は竹にかくれたる里

空蟬にたとへん恋の浅間しく

うき雲へだつ人の倂

松柏夕をまつるやしる数

墨江の網の魚わかつ月

露ふんで廿日あまりを浮れたる

秋をふり行宗鑑が宿

山がらす哀を何に啼やらん

山 良 翠 山 翠 良 山 翠 良 山 翠

霞の底を水ながるめり  
粃種の俵ほどけば花散て

彼岸過より土間に居ける

二度来れば二度の詠や山桜  
門さすも惜しき夕や庭の花  
うつくしき茶のからも有花の下  
花見んと行水したる夕かな  
息杖に薪もたせて桜かな

山 良 翠

伊勢津

理玉

伊賀上野

机山

、

单鶴

、

蛙方

、

如風

ちる花や畳む扇にはさまるゝ	、	神戸	祖流
朝鷹の羽根より散ぬ山桜	、		里鶴
よそも花に早き朝げの煙哉	、	玉垣	菌井
散るものにして戻りけり夕桜	、		孔阜
暮の世は人にこそあれはつ桜	、	寺方	里朝
月や夜半桜を覆ふ峰の雲	、		芻竜
留守の戸も見ゆる桜の木の間哉	、	津	子良
音もなく只香ばかりに散桜	、	相可	右栗
朧夜を荅むさくらの匂ひ哉	、	松坂	推巳



花の山罪作るべき人もなし

、 大塚 鳥翠

見渡せば桜につゞくさくら哉

河内 雪江

それさはる杖をばひかへ山ざくら

、 船橋 有山

案内者もみへつ隠れつ山桜

、 楠葉邑 一笑

雨の花傘にさはると覚けり

難波 尺艾

幾万の城にも暮し我さくら

、 奇淵

野鴉の花ふみかねて飛に鳧

、 瑞馬

花散りて山一おしの曇哉

自楽

花の庭にかけふるしたる簾哉

魯隱

どの花の散ともみへず散に梟

長斎

よし野にて

花の雪銅の鳥井はつめたくて

蜂友

花踏て濡色に啼鶯か

鶯雪

花の香の柳にもどる夕かな

葵島

ちればこそいとゞ桜は初ざくら

大江丸

山ざくら徒ならぬ匂ひかな

よね彦

花一枝乞ゆるされて迷ひけり

勇

花の香のかぎりに明るまくら哉

大和

万和

ちる花や月星ともに西へ行

撰池田

遅春

花散て山寺遠く成にけり

、

鹿楓

ちる花に首筋寒き入日哉

、

李杏

出きらひを慰め申せ初ざくら

、

李凍

遅ざくら吾妻は雲に時鳥

、

其丸

花に風君がまゝにもならぬ也

、

瓜坊

柴船や折／＼花の夕あらし

但馬網場村

十手



笈仏を花のあたりに卸けり  
花の咲雨つれ／＼の夜明かな  
鶯のうつり来にけりはつ桜  
花曇どちらになりぬ宵の山  
日は斜なりさくら咲後やま  
花笈よるは崩れて草の上  
夜をこめて糺の関越ん花盛  
御代うたふ花に我身も静也  
山ざくら鍋に煮る茶の常なる歟

、 、 、 、 、 、 、 、

月庵 素人 盤露 延之 湖山 知友 祥禾 嘉敬 其英

旅の花妬く思ひて過にけり	嶋原	万夫
さくら狩巢の杜宇見付たり	、	季明
夜ざくくらや手折んとすれば鳥の立	、	杜陵
散のこる花を筑紫の土産哉	、	諫早
花に来て眼閉るもうき世哉	、	輝白
花の山どこともなしに日の暮る	、	孤石
朝曇花の使の来りけり	、	都巽
繕ひし桜はさくら山ざくら	、	画鮮
		文塘

霞む鏡をつゝむふる敷

今参長閑に賀殿立舞ふて

只おかしげにゑめる人かな

風落て竹の末より月のぼる

づる／＼と出し秋塵の瘦

花の食焚が山路の薄煙

静さや夕雲帰る花の上

散初て人に罪あり山桜

、  
、  
、  
嶋原

桃仙

春喬

完雅

桃仙  
有隣

夫

仙

隣

水の上も花としくめる弥生哉	、	多比良	万夫
花七日吉野に入日なかりけり	、		楽只
逢に来て花に一日後れけり	、	土黒	吐竜
散かゝる花のかつらの宿り哉	、		利貞
花に酔てまたむつかしや人の上		豊前小倉	夏夕
春小雨はれてさくらの世成けり	、	中津	夕隣
ちる花も漕れ行らん杉筏		筑前直方	五雪
命なりとまてば読けり花の山	、		寄木
山ざくらまた上張の花見哉	、		此原



人しばし物いひやみぬ花曇

、博多

吾来

曉鐘や花ふり返り／＼

、姪浜

浦詠

明白迄はまたぬや花の夕嵐

、

櫓睡

夕ざくら見返る山の風白し

、

絮風

よしあしのうき世の外や花の中

、

二扇

ゆるされて折ぞ煩ふ花の枝

、

俚橘

咲かゝる花の下陰露気なり

、

喜水

下戸ひとり花に酔けりうかれけり

、朝倉

市峰

うき雲の花を越いく日和哉

、植木

可角

夜ざくらや我ほど老し人は居ず

、若松 可十

泣児の舂に散るや夕桜

備後布野 ふもと

柚が飯食て明さん山ざくら

、三調 楚雲

思ふまゝに散て桜の静なり

、福山 庭白

よし野に着けれ共、雨はやまず。麓の桜は散／＼、

見渡す谷／＼は、水を上る雲に木立もみへたる。されば

花と見よこれも吉野ゝ雨の雲

備中倉敷 寄人

花咲や潮あがりの筈丸家

羽州秋田 素大

初ざくら桜所はさもなくて

、 五明

花の昼水無月比の空の色

江州八幡

柏翠

蝶やどる桜の中のさくらかな

津軽広崎

里川

山ざとの人に見するさくら哉

尾張

龍淵

はせを堂にて

花咲と人ばかりなり東山

濃州

千阿房

瀧さくら襟につめたき雫かな

遠州角丸里

可月

花盛うれしき命かぞへけり

全

花ざかり月のみ呼を過る也

、  
、  
原川

拾席

花の山一日筆にのこしけり

、

月圭

基佐が馬はなれけり山桜

、

鬼卯

散さくら行者の瞳うごくかと

長州赤間関

花休

何坊に今夜宿らん花盛

、

仙梨

来る人の白髪がち也遅桜

、

和由

杖捨て花に閉たる眼かな

、

路若

花に明て花に暮行我身哉

、

指月

小嵐の隅とやならん散桜

、

里暁

むら雲や松は暮行花の山

、

蟻好

家を出ればいよ／＼花の真昼哉	、	市冠
花守となりて心のならみけり	、	里水
花につれて一夜二夜の旅寝哉	、	花暁
山ざくら散かゝりけり川筏	、	湖滴
人恋し明るまつ花の夜たゞ散	、	羅風
遠近の社友を会しつゝ供養の筵をひらきて		
仰ぎ見よ桜月夜の東山	月影館	萬井
咲も残らぬ花をくゞりて入日哉	安芸南方	厲掲
青空に桜くもれる日和かな	、真良	湖江

眼につけばこそ杣も折れやま桜

、小方

可友

世のさまや桜のひるも飛鳥川

阿波西分

羽角

初ざくら深山は雪のまた寒し

豊後キツキ

梅月

火をかれば椿さし出しぬ桜狩

サヌキ姫浜

桃里

木食の花にも凄き眼かな

、仁尾

宗徳

翁の句意も恐れ侍れど

年／＼や花に桜に猿の面

丹波梶原

洞々

人しばし静りて散さくら哉

、大山

武陵

花の裏は皆青き柴の春細し

翠実

生野路の花や正木をうしろにす

丹後河守

梅居

もどり路は思はず遠し桜狩

夜をこめて開かけたりはつ桜

しのゝめや花咲志賀の山つゞき

世のなかやましていはんや花と月

年毎にみつる此花養は

魚も淵に躍るや花の吉野川

春風や心の動く花のかげ

軒かくいはらし憎し花の陰

花のかげにやさしくもがなさくら草

とにも世は花過にけり八重桜

雲州日御サキ

播磨酒見北条

、 梅廬

若州谷田部

汀波

日向美々津

吟龍

作州倉敷 春山

アハ 圭天

イヨ今治 周路

卷玉

明わたる雲の雫か山ざくら

アハヂ

起石

咲にけり見ぬ世の人も見し桜

備前岡山

幽雅

山ざくらかぎりある日を忘けり

筑前井木

布館

ちる花の一崩れにぞ静なる

城南朝暮庵連

戸口

やゝうつりては蝶のぬる袖

子鬯

玉盤に春の日脚のかたぶきて

化蝶

宵月ながら山路也けり

五牛

たくましき名と改る出代に

両林



茄子の味に秋の更行

五位鷺の淀のわたりは下りもせず

護摩にのぼせし顔を吹るゝ

中衣のいろも浮寝にさめぬらん

菊さま／＼の儘にかれたり

世にしたふ酒の泉のいく戸前

誰に伝へし仙菓を祝る

月満る夜も蚊の声に明近み

かこみをほどく蛮事社あれ

吾桂

口 蝶 牛 林 鬯 牛 桂 口

ぬれ色に切火のうつる洗ひ米

あし高はれて海たいらなり

出ぎらいの名のうせてけり花の頃

紙に包し木の芽贈りぬ

朝戸出や雲たつあとの山桜

城南

魯長

先師年／＼花供養の句をせがまれけるに、

今年は吊ふ事になりぬ

花びらのへばり付たるたもと哉

堅田

一之

花に手をあてゝ嵐を聞夜哉

浮御堂

桃醉

蝶 鬘 桂 林

大かたは雲に先だつ桜かな

アキ

田禾

蝶ほどに軽からば世は花の上

相州

丈水

乙鳥の子のかさむ巢籠

半素

凡人ものどかにおとづれて

芹尺

只釐等のひゞきこそすれ

松調

宵の間は月きら／＼とさし渡り

五青

浪のうね／＼遠近の霧

祇水

何神ぞ初穂刈藻の懸りぬる

眉山

ふりおふ袖も伽羅の移り香

反古襖やれては文のほのみへて

童のゝめく雪の広庭

面白や袋はあれど米のなき

ほつ／＼ほつと練薬の瑞

杏の青くながるゝ八日月

峰の崩れて雲の行みゆ

忽に鎧のかはる墨ごろも

吾妻の耳に京の黄鳥

一壺

南謨

川雅

凶南

林雪

許笠

几旭

生雅

及古

春の雨芳野初瀬も枝たれん  
連／＼とこそ畑を打けれ

呉雪  
吞波

たれ込て山／＼くらし遅桜  
花の頃牛にのる人のらぬ人  
常ならぬ花の盛や暮の跡  
山ほどに世を経る花の日数哉  
けふのうへに翌も有けり桜狩  
朝まだきさくらにしらむ家居哉

相州関口  
眉山  
、河原口  
五現  
、上依知  
松調  
、関口  
一壺  
、積  
南謨  
、鎌倉  
梅豊

日の目見ぬ谷は桜の夜明哉

、藤沢駅

曾登

薄曇さくらよ／＼ひがし山

、礪部

悦応

降やさくらふもとへ届く幾千尋

、室田

巴橋

片側はさくらなりけり大堰川

、猿ヶ嶋

寿杏

深山木の花走り井の闇哉

、

半素

八重山や桜はよそにかはらねど

、

丈水

花守は箒とる身の果報哉

、洛

秋水

分入らばいづこを踏ん花の雪

、

竹下

蚕飼する里はさくらの盛哉

初花や去年ともに見し人に逢

水の面は花より先の嵐哉

木作りの手にもかゝらで散桜

夕暮や野みちに散し桜花

見る日より見ぬ日に花の噂哉

花の咲木の有たけは我住家

花七日ことしも活て仕舞けり

初ざくらかしこく咲て仕舞けり

、 乙道

、 虎白

、 其白

華頂僧 如風

洛 舍六

、 斗九賀

、 蓮和

、 後楽

、 管鳥

音もなき桜の中の流れ哉	、	杜隣
世の中や花見る山に松多き	、	桂郎
我に物思はする花のさかり哉	、	在貫
うつぶいて居れば淋しき桜かな	、	春也
さくら折る影に驚く月夜哉	、	双南
しる人や花のかげよりあらはれし	、	とほる
吹おろせ蹄の外のみねの花	、	芹水
塵塚のちりなかゝりそ庭桜	、	驢丹
花にいづれ越の長浜行思ひ	、	百池



散花のうしろに笑ふ鳥哉	、	五芳
どの花の散ともしらず散にける	、	葛年
鳥と我と住めばさくらも咲にけり	、	鹿舌
十分にまうけすまして花供養	、	其成
ちる花の下になりけり八重桜	、	馬印
押なべて唯一いろにさくら哉	、	芦涯
年／＼の花に賑ふやどりかな	、	土卵
山ざくら花より上に雲もなし	、	月峰
かぞへ日の花に物うきゆふべ哉	行脚	青銭

ことさらに花見る一人二人かな

洛

可董

月の輪にて

桜より下は時雨る日和かな

漢水

どつさりと雨を持ちり山桜

斗入

水みつる風情や月の桜花

芦蝶

洛東 芭蕉堂蔵版

京四条通河原町西へ入丁

書林

勝田喜右衛門

(裏表紙見返し)

（裏表紙）